



神聖騎士

オリアーナ

淫魔の牢獄

小説 高岡智空
挿絵 草上明

立ち読み版

プロローグ	神聖皇国ミレニア	006
第一章	銀の修道女	010
第二章	不浄の剣	045
第三章	贖罪清掃	106
第四章	公開背徳肛姦	145
第五章	催情魔の宴	191
エピローグ	不浄なる毒	249

登場人物紹介

Characters



オリアナ

平素は下級の神官。実態は神聖皇国ミレニアを治める神子に仕える騎士。妖魔の暗殺なども担う。

アルベルティーナ

淫魔の上位種で、ミレニアを襲う淫魔集団の統率者となっている。無邪気な少女のような容貌。



パトリツィオ＝ヴェレッティ

ミレニアの神子。幼少の頃オリアナに世話を受けたこともあり、関わりが深い。

エルザ

神官騎士で構成される部隊の副隊長を務める女性。

ビアンカ

大教会の書庫で蔵書を管理する司書

催情魔に影響を受けた者たちが集まり、淫蕩に耽る部屋だというのか。そして自分人目を避けるつもりでいたのが、まんまとここへ誘い込まれてしまったというわけだ。(ならば、当然エルザも……そうなのですねっ?)

問いかけるように視線を投げかけると、悔しそうに唇を噛んだ彼女が顔を伏せる。

「不審な姿を見たって通報を受けて、ここへ……あとは、オリアナと同じだよ。まったく、情けない話さ……あひいっ!? やっ……いまは、やっ……ダメっ……んうっ!」

「おいおい、せっかくここに来たのに、おしゃべりばかりかじやつまんねえだろうが」
拘束された二人に群がっている男は、それぞれ五人ずつになっていた。

エルザを拘束する男の一人が、自身が汚れることも厭わず背後から彼女の美しい顔に頬を擦り寄せ、その耳を舌先でピチャピチャと舐めしゃぶりだす。その途端、ピクンツと肩を跳ねさせた赤毛の騎士が、四肢を震わせて腰をくねらせる。

「エルザっ!! おやめなさいっ、嫌がる女性になんという仕打ちを……っ!」

「へへへ、よく見なよ、エロ下着の姉ちゃん……あの女のどこが嫌がってるって? エロい声で啼いて、もうマンコなんてビショビショだぜ……おい、見せてやれよ!」

「ひっっ! やっ、やめろっ、放せええっっ! いやあああっっ!」

よく見れば、神官騎士の制服であるパンツはすでに脱がされており、エルザは前掛けをただけさせられれば、すぐに下半身が露出してしまいう格好になっていた。そして剥きだしになった、見事な脚線美の付け根を目の当たりにし、オリアナは驚きに目を丸くする。

「う、嘘、ですわ……エルザが、そのようなっ……」

「あぐっ、ううう……み、見ないで、オリアナ……んっ、ふあっ……あああっ……」

両側から太ももを掴まれて開かれ、陰部を晒される羞恥に赤くなつた顔を背けるエルザ。つい先ほど濡れたというものではないくらい、太ももから膝までがベツトリと透明の粘液で濡れ汚れており、その奥では熟した果実のように、綻んだ淫華が大量の牝蜜を吐き流していた。懸命に脚を閉ぎそうと、押さえる腕の力と拮抗してブルブルと震えているのがわかる。けれど横合いから伸びる腕に乳房を揉まれ、またも耳を舐められるとその力が抜けてしまうように、四肢を弛緩させてしまつていた。

「最初は抵抗したが、チンポしゃぶらせて、乳とマンコ弄つてやりや……へっへ、ああなつちまうのはすぐだったぜ。ここ最近、簡単な女が多くてありがたいもんだ」

(……そういうことですのっ……やはり、催情魔の影響は最近になつて……)

心や身体を奪われるのは、ティーナと直接対峙した者だけなのだろう。また対峙せずとも、大教会内にいる彼女に襲われ、堕ちた者も多くいるはずだ。

そうして自分の人形を増やし、教会内に密かに淫気を充満させた結果が、ここ数日連続で起きている高神官たちの不祥事——それが表立つたということはつまり、人目を気にせず淫行を求め始めるほど、淫気を吸つた者たちの理性が奪われているということだ。それほどに濃厚な淫気が、大教会に広がっているのだ。

(エルザも、強い理性で堪えてはいますけれど……少しの刺激でも身体が過敏になるくら

い、淫気の影響を受けているに違いありませんわっ……)

思わず、氣遣うように彼女をジッと見つめてしまうと、その視線を感じた彼女は弱々しく首を振り、懸命に赤い顔を背けてささやく。

「い、やだっ……お願いっ、見ないで……後生だよ、オリアナあ……あうっ……」

「なんだ、お友達に見られるのは恥ずかしいっての？ うはあつ、急にしおらしくなったエルザさん、可愛いじゃんか……へへ、失礼しまゝすっ」

拘束する男がエルザのあごを掴んで前を向かせると、ニヤニヤと笑うもう一人の男は開いた女騎士の股に顔を埋め、大きく舌を伸ばした。

「なっ、にを……ひくふううっ!! んああつ、はあつ、あああ……やつ、やああつ!!」

「おら、顔逸らすんじゃねえよ。友達に見てもらえ、騎士様のエロ顔をよお?」

——ジュルツ……ジュブブツ、ジュプツ、クチュウウツ……ジュルルツ!

「ひっ——んくあああつっ! ひやらっ、ひやいつつ……いひいいつ!」

唇が淫華に吸いつき、プックリと膨らんで充血した小振りの肉芽を指で摘まれ、エルザは甲高い嬌声を抑えることもできず、腰を跳ねさせて飛沫を撒き散らしてしまふ。男の顔が小刻みに動いたとき、僅かに見える腔内に埋没した舌がジュブジュブと水音を奏でて蠢くたび、指先が躍るように動いたとき、エルザは喉奥から搾り取られるように淫声を響かせ、白濁塗れの顔をガクガクと振り乱してゆく。

「エ、エルザっ……くっ、いい加減になさいっ! すぐに彼女を放し——きひゅっ!」

拘束を解こうと身を振り、立ち上がろうとした瞬間だった。薄い黒下着の上から豊乳の先端を摘み上げられ、引つ張られながら乳肉を揉みしだかれてしまう。

「おっと！ おいおいなにしようってんだ？ せつかく来たんだ、楽しもうぜえ？」

「んああっ……はふっ、ぐっ……なっ、なにを言っていますのっ、こっ……んううっ！」

手錠による拘束があるために、押さえつける人手は最小限でよいと思われたのか。二人の男が前に回り込んで、一人は尻もちをついたオリアナの脚をM字に開かせ、もう一人は首筋に顔を寄せて長く舌を伸ばしてくる。

「ひよお、美味そうな首筋だぜ。いっただけいっ……れおっ、れじゆるううっ……」

「くくっつ！ やっ……んっ、やめ……な、さっ……はあっ、あううっ……」

生臭い吐息が鼻先に届き、熱い粘膜の感触がペロリと首筋に這い、ゾワアツと背筋に寒気が走る。快感などまるでない純粹な嫌悪のせいで声の上擦り、震えてしまう。

舌全体を張りつかせ、磨き掃除のように何度も首を往復したり、かと思えば尖らせた舌でチロチロと、くすぐるような感触を与えられて、背筋の震えが止まらない。

「あ、そうだよなあ……今日は暑かったもんなあ？ へっ、すげえ濃い汗臭……」

「っつ！ お、お黙りなさいっ、下劣なっ……はうっ、んああ……」

——ズジュウウウウウウウウウウウウウツツ、チュブツ、ジュブブツ……

「ひやうううううううううううううううううううう……」

ピッタリと唇を張りつけられ、耳障りなほど肉を吸う音を響かせ、男の口内に肌が吸わ

れてゆく。首筋から伝わるおぞましい感触に、思わず両腕から力が抜け、膝から下をガクと震わせて弛緩させてしまう。

「お？ こつちも抵抗なくなつたじゃん……ほいつ、エロパンティご開帳♪」

「へっ……ひっ、やっ、やめなさい、な……あぐうっ！ んあああっ！」

膝に手をかけられ、思いきり脚を開かされても、それを閉じる力が入らない。太ももに引つ張られて腰布がずり上がり、銀色の恥毛を透かす恥ずかしい黒ショーツが衆目に晒された。そこへも男の一人が顔を寄せ、さらには背後からの接触も激しくなる。

「へええ、マンコ丸出しみてーなパンツで、教会歩いてここまで来るとはねえ……いやいや、随分とド淫乱なシスターさんもいたもんだぜ」

「ちがっ……違いますわっ！ 先ほどから言っています、これ、はっ……ひぐうっ！」

反抗の意思を示して声を上げるも、腋の下を通って胸元へ伸びる手が、ブラの上から乳房の形を大きくひしゃげさせ、その先端で布地を押し上げていた突起をキツく摘む。

「ああん？ なにが違うんだか……ほれ、どうだよ。さつきから首舐められてるだけだつつうのに、乳首までコリコリになつてんじやねえか。どっから見てもド淫乱だろ」

「ひうううっ……ひっ、ちが、ふっ……こえ、はあっ……くああんっつ！」

ブラカップをずり上げられた瞬間、プルンッ！ と弾け飛ぶように晒された豊乳を手の平で持ち上げ、重量を確かめるようにユサユサと揺すり、指先では硬く尖った乳首を転がすように捻って引つ張る。先端ばかりを執拗に嬲られているだけなのに、そこから伝わる



痺れが柔乳の表面から奥へ染み込み、肌の下が刺激されているようだった。

（ふああ……うっ、んんっ……な、なんですの、これは……くっ、ひゅうんっ……）

跳ねた腰ごと太ももが押さええられ、男の鼻先が淫部に擦りつけられる。しかもよく見れば、それは男というにはあまりに幼い、先ほど背後から掴みかかってきた少年だった。

「ふんっ、ふんっ……んっ、すううう……くあああつ、た、たまんない……汗だけじゃなくって、奥からエロい臭いがしてるよお……くんくんっ、はああ……」

「お、おやめなさいっ……なにか、事情があるならば聞きますわ、ですから……」

それも聞こえていない様子で鼻を鳴らし、少年は自らのズボンを下ろしだす。

「ね、ねえ、舐めてもいい？ いいよねっ、上手くやるからあ……へっ、はああ……」

「なっ……なにをつ、やめ——ひいひいんっつ！」

クチュウウ……と、少年はショーツ越しの秘部に口づけると、ヌラヌラと唾液を塗ったくりながら唇を滑らせ、汗で蒸れた股間に舌を這わせる。刹那、首筋から伝わる嫌悪感に近い、けれどそれ以上の汚辱を感じて背筋が凍りつかされた。

（わ、わたっ、くし……なにをされて……っつ！ ひぐっ……んっ、そ、そんなところを……ひやうっ！ んあつ、な、舐め、る……なんてっ、ひやあんっ！）

他者に触れられるどころか、視線さえも許さなかった銀色の茂みを一瞬にして唾液塗れにされ、気が遠くなるような羞恥に飲み込まれる。しかも少年はそのまま四つん這いのよな体勢で顔を股間に擦りつけたまま、片手と膝で身体を支え、もう片方の手を自らの股

間で猛烈に動かし始める。

「はあっ、はあ……あむっ、んじゅっ、じゅるるううっ……ああ、美味しい……」
「へへへ、また始めやがったぜ、この変態小僧が！」

（なんですの、いったい……このコ、なにをしていますの……んっ、くううっ……）
疑問に集中する暇もなく、舐め上げられる股間から断続的な電流がビリリツと迸り、腰が躍ってしまう。お尻の下には大量の汗が滲みだし、首筋や腋の下からも、体温が上昇して汗が溢れてくるのを感じる。それを逃すことなく、首を舐めていた男がペロペロと汗を舐め取ってゆく、その行為にたまらないほどの恥辱を覚えさせられた。

「おーおー、気持ちよさそうじゃねえか、シスターさんよお？ 見ろよ、わかるか？ この小僧はなあ……あんたのマン汁啜って、てめえでオナってやがるんだぜ？」

「はうっ、あんっ……んっ、はああ……なん、ですって……お、な……？」
意味のわからない言葉を聞いて首を傾げると、嬉しそうに男が解説を口にする。

「おっと、そういう教義では禁止だったよなあ？ 自らの淫欲を鎮めるべく、自らの手で性器その他の身体を慰めることは禁ず……だったか。へっへ、つまり小僧はいま、そいつをやってるってわけよ。しかもそれを戒める、シスターのマンコをオカズにしてやがんだ……こんだけ興奮すんのも、当然だわなあ？」

「つつ!? ま、さか……ひっ、や……やめっ、おやめなさ——くひゅううつつ!?」

ようやく事態を理解し、神職に就く者として説教しようとした瞬間、またもや乳房を揉

みしだかれ、桃色のニプルがキュキュツと締めつけられ、転がされてしまう。いつの間にか小指の半分ほどまで肥大させられていた乳首を摘み、背後の男が笑いかける。

「あんただって、まんざらでもねえみてえだな……ほれ、乳首がピンピンだぜ。おお、マシコもドロドロにされちまって……へへ、そろそろこつちも気持ちよくなるうかねえ」

「ぞ、戯言ざれごと、など……大概に、んああつ！ な……なさい、ませつ……くふうつ！」

扱あつかくように乳首を擦られ、胸の奥が締めつけられるような疼きと切なさに苛まれる。首を振ってそれを拒絶しようにも、チロチロと肌を撫でる舌の感触がそれを許さず、男の獣欲に身体中が包まれてゆくようだった。

（ふああ……い、けません、わあ……意識を、強くつ……んつ、んううつ!!）

胸を揉まれ、乳首を抓られ、首も太ももも淫部も、男の唾液でドロドロにされている状況に、羞恥の炎が再点火される。潤みかけた瞳を閉ざして心を叱咤するも、不意に近くに感じた熱い感触に思わず目を開いてしまい——そして後悔する。

「あ、なっ……な、にを……うくつ……こ、このようなものをっ……」

「ふへへ、お堅いシスターでもわかるんだなあ、チンポの形つてのはよ」

目の前に立つのは二人の男、けれどその下半身は剥きだしで、突きだされた股間には牡のシンボルが隆々とそり立っていた。片方はドス黒く濁り、もう片方は少し桃色が残った様相を見せる肉塊は、どちらも血管を脈々と波打たせ、滾たぎる欲望に跳ね震えている。蒸れた臭気が漂って鼻を刺激し、こびりついた恥垢が不快な汚辱感を込み上げさせた。

「なにするかなんて、わかりきってるだろ？ あっちの騎士様と同じことだ……くっつ、その綺麗な顔を汚せるっただけで射精しちまいそうだぜ」

「え——ひつつ、やつ……なにを、しているのですっ……んっ、くああ……」

ニチュツ、クチュツ、グチュツ……とくぐもつた耳障りな水音を響かせながら、男たちはオリアナの眼前で己の肉棒を抜き始めた。その醜悪な光景に顔を背けるが、臭いと音だけは遮断することができず、身体中を這い回る手や舌の感触とともに、神経に刻み込まれてしまうようだった。

「さつきから言ってるじゃねえか、その面あ、ザーメンで汚してやろうってんだよ」

「そうそう、俺らの精液で化粧してやるからな……くうっ、ゾクゾクするぜ！」

言いながらも、男たちの手の動きはみるみる速くなり、さらに肥大化して汚液の飛沫を飛ばし始める。淫欲に歪む男たちの言葉にゾツと背中が震え、無駄だとはわかっていても拘束から逃れようと身を振るが、その拍子に震える乳房が男の手で鷲掴みにされ、跳ねる腰に少年の頭がグイグイと擦りつけられる。

「くひやうううっつ！ いっ、はっ……な、なに、いまの、はあ……ひやふっ！」

秘部が痛烈な痺れに満たされ、甘い疼きにゾクゾクと背中が粟立ってゆく。気がつくとなんは熱い汗でビッシヨリと濡れ、特に熱く疼いて止まらないのが、少年が顔を埋めて吐息と舌の感触を与えてくる、淫部の奥深くだった。

「はあっ、はあ……んじゅっ、ちゅっ、じゅばっ、んううう……ふあっ、はああ……お姉

さんのマンコ、すっごい濡れてきてるよ……美味しいなあ……んじゅるっ！」

(ぬ、濡れっ……私がつ!? あ、あり得ませんわっ、そんな出鱈目を……ひうつ!)

シスターであり、さらには神聖騎士として主と神子に身も心も捧げた自分が、他者よって淫らな気分になどされるわけがない。気持ちを引き締めるように唇をキュッと結び、歯を食い縛って声をもらすまいと強く言い聞かせるが、その心を揺り動かすように、背後の男がショーツに手を滑らせてきた。

「……へへへ、ほおれ見な。こんなベトベトのもんが、てめえのマンコから滲んでるぜえ？ 小僧の唾でも汗でもねえ……生臭えマン汁じゃねえかよ」

「んぐううううっ！ お、お黙りなさいっ、無礼なっ！ んっ、ひゃぶっ……」

ヌラヌラと光を反射させる男の指が、唇を撫でて口内に押し込まれる。口いっぱい広がる、己の唾液と混じり合った甘酸っぱい味に舌が痺れ、同時にその液体の正体を羞恥とともに思い知らされ、カアアツと顔が熱くなる。

「んうっ、ひゅむうう……う、うひよっ、れひゅわあ……ひやううんっ！」

ショーツを鼻先でずらし、少年の舌が陰唇を掻き分けてグチヨグチヨと音を奏でるように、粘膜の奥へ侵入してくる。体内を蹴られる未知の感触に腰が跳ね、少年の顔に濡れそぼった銀色の茂みを押しつけてしまい、響く粘水音にさらに恥ずかしさが込み上げる。それとともになにか、えも言われぬ淡い感覚が肉体の芯を這い上がり、ゾクゾクと背中が痺れて声を抑えることができない。

自分の愛液と唾液で湿った指に乳首を扱かれ、首筋には二度三度と熱烈な吸い上げキスを浴びせられ、自分では見えないが、充血した痣がいくつも刻まれているのがわかった。さらに、鼻先で続く自慰によつて男根からは濃厚な牡臭が溢れ、いくら顔を逸らしても届いてしまうその臭気で、頭がポーツツとしてしまう。

「はあつ、はあつ、くっ……ううっ!」「イクぜつ、かけてやるっ……くああつ!」
「んああつ、はつ、な……なにつ、ひいつ……んくうううっ!!」

——ビュクビュクツ、ビュルルツ! ビクンツ、ドブドプツ、ドピュウツ!

顔の左右から十字を描いて交差するように、おびただしい量の白濁液がぶちまけられ、淫らに歪んだオリアナの顔を汚してゆく。まるで溶けた蠟のように熱く粘っこい感触に、火傷するかと思うほどの刺激が伝わり、ビクウウツと背中が跳ね震えた。その刺激が先ほどから感じる感覚をさらに膨らませ、身体中が妙な疼きに満たされてゆく。

(ひあつ、熱っ……くふううっ! なん、ですの……これが殿方の、んぐっ……)

刹那、むせ返るほどに生臭く、青臭い栗の花臭が鼻先に立ち込め、顔中を包み込んでゆくような感覚に襲われる。男の欲望に肌の表面から毛穴の奥まで、すべてを汚されたような錯覚を覚え、こらえきれないほど背筋に粟立ちが広がる。そこへ——。

「へっ、せつかくの初ぶっかけだ……てめえもこのままイッチまえよ!」

——グリユウウウツツ! クチュクチュウツツ、キユウウンツツ!

「きひいつ……くひあああ——っつ!」

「はひゅっ、ひっ……くひいんっ……ひあっ、はああ……」

お腹の中がドロドロの粘液で満たされているのが、はつきりとわかる。熱い脈動で波打つ液が腸壁を内から撫で擦り、腸肉を溶かされているようだった。引き抜かれるペニスにもたっぷり絡んでいるそれは、めくれ返る菊皺粘膜に染み込み、抽挿されるたびにジュプジュプツ、グプウウウ……と淫らな水音を奏でる。それを聞いて数名の男女は嫌悪を露わにするのに、すでに淫気に蕩けていた者たちは少しずつ唇を緩め、視線をギラつかせ、食い入るようにオリアナの痴態を見つめ続けるようになっていた。

「……まったく、大教会内でこんなことするなんてなあ……」「ほ、本当に……ぶくっ」

「ひいつ、あっ……もう、いけませんわあ……んぐっ、くっ、ふうううっ……す、すぐに、ここを……は、離れ、へ……んぐうううっ！ くあっ、はっ、はああ……」

熱視線に晒されながらも懸命に言葉を吐きだすが、すでに彼らの耳には届いていないかのようにだった。それどころか、理性を保った言葉を吐きながらも淫蕩に表情を蕩けさせ、教義に反する肛姦で喘ぐオリアナの姿に興奮し、男はロープの股間を大きく膨らませ、女は太ももをモジモジと擦り合わせて呼吸を荒くしている。

「ほれほれっ、どうじゃ！ 見られておるのだぞ！ 貴様の淫らな清掃姿をなあっ！」

——グニュウウウツ……ズプニュウウツ！ グジュツ、グプウツ、ズボオオツ！

「いひいひいんっつ！ あひっ、ひあっ、んつくうううっ……ふやああっ！」

アナルだけの絶頂を迎えさせられ、それから延々と硬く太い肉棒で腸壺を抉られ続け

ていたせいで、もはや菊粘膜のすべてはその熱い感触に蕩け、激しい挿挿にも柔軟に應えてしまうほど、こなれてしまっていた。柔らかくなった淫粘膜が、素早く引き抜かれるペニスをチュウチュウと吸い立てて優しく擦り、尻穴ギリギリに亀頭が達するまで、牡を積極的に悦ばせる動きを披露している。

そこで勢いよく腰を叩きつけられると、牡槍を最後まで愉しませようとキツく締まっていた菊肉道が、今度は一気に開かされてゆく。純潔を奪うような貫通の快感を相手に与えるときともに、蕩けて粘液に塗れた柔粘膜はピツタリと男根を包み、襲の一筋一筋で丁寧にしやぶり立てているのだ。快感に悶えるように肉棒はビクンッと大きく震え、その反応によつて予想もしない部分を挟まれる愉悅が迸り、オリアナは身も世もなく叫び喘ぐ。

「くああああんっっ！ ひゅっ、んっ……はあああんっっ！」

（こんなっ、ことお……んくっ、あつ、み、認め、ませんっ、わあ……んくうっ！）

心の奥では快感を拒絶しようとするが、罪悪感とともにもたらされるこの強烈な官能の波は、心よりも先に身体を懐柔しようとする。初めて受けた陵辱、小部屋で男たちに廻られた乳房や淫唇から感じたものより遥かに強い甘刺激に、覚えの早いオリアナの尻肉は従順に應じてしまっていた。直腸を完全に埋めきつた肉棒の先端がS状結腸にまで達し、そこでピタリと動かなくなる。代わりに尻肉に押しつけられた腰が小刻みに震え、腸の奥深くがピリピリと痺れるような刺激に苛まれた。

「んくっ、ふっ……ふあああああつ、あつ、はああ……ひっ、はっ……んうっ！」

腸粘膜に包まれた肉棒は動いていないのに、張りだした肉傘や太い血管に圧迫される菊肉襞が異常なくらい敏感になって、もたらされる肉悦を享受してしまう。獣欲に晒されるのとはまた違う、本能を揺さぶるような快感の波に下腹部が痺れ、激しい叫びとは異なる感極まった嬌声が、喉奥からこぼれだしていた。

「さて、そろそろ一度くらいは達させてやるかなあ……アナルのよさを覚え込む、いい機会だからの。こいつを一度味わうと、クセになるぞ？」

「いっ、ひあっ……いひやあ、やめ、へ……んくっ、くふううんっ……んああ……」

逃げだすように膝を前にずらしていくが、亀よりも遅いその歩みで逃れられるわけもなく、肉棒の振動が菊壺内を覆い尽くしてゆく。研ぎ澄まされる神経はペニスの感触を余さず察知し、粘膜が無数の舌で舐め突かれているような感覚に襲われながら、ゾクッ、ゾクッ！ と甘い痺れが這い上がるのを、受け入れてしまう。

（こ、こえええ……いひっ、ひっ、ら、めっ……だめっ、れす、わああ……んっっ！）

膝も腰もガクガクと震え、とうとうその場から動けなくなる。上体は力を失って床に崩れ折れ、豊乳が冷たい床に押し潰されてグニュウツツとひしゃげて広がった。膨らんで突きだしていた乳首は床に擦られて甘い快感を生み、胸の奥を蕩かしてゆく。

「くおっ、はっ……んああああっ、あひっっ、ひきいいいっっ……」

ガチガチと歯を鳴らせて顔を上向かせると、唇が大きく開いて、粘っこい唾液の糸を何重にも引いた淫らな光景を晒してしまった。そんな無様な表情を見せつけながらも、胸の

奥に染み込む快感から抜けだそうと、両腕に力を込めた刹那——握り締めた指が男たちの肉棒に絡みつつき、ヌルリと粘液で滑って亀頭から根元まで抜き抜く格好になる。

「あつくうんつつつ?! ひぎつ……くうあつ、はつ……はああつ……つつ!」

指先で作った肉筒をベニスが貫く衝撃が、腸肉を抉る肉棒と同じ感触を味わわせ、最高の快楽を流し込む菊肉蹂躞の快感をさらに強く受け取ってしまう。その衝動がザワワツと全身の肌を粟立たせ、硬い感触で埋められた菊壺がキュウウツと疼きを発した。

(はふつ、こ、こん、らつ……ひつ、ひいいつ……んつつ、はああつ……)

——ビクウウウツツ……ビクビクツ、ビクンツツ!

「くくくくつつつ、はつ、あああつ……んくつ、んくううつ……くふうつ……」

括約筋が一気に締めつけられ、肉幹の感触を噛み締めるように狭い肉道が窄まってゆく。触れられていない牝壺はパツクリと口を開き、肉襞の奥からジワジワと染み溢れた淫蜜が、だらしなく緩んだ膣口から滝のように流れ落ちていった。思わず喉奥から溢れそうになった声を懸命に抑えるが、切なく跳ねる身体の反応は止められない。

押しつけられて潰れた肉丘の先端では、乳肉に埋没したまま震えるニプルが大きく跳ね上がり、身体の躍動をさらに激しくさせてくる。その動きに合わせ、蠢動する尻肉の奥からは何度も快感の波が流れ込み、菊壺を満たす甘い痺れがいつしか、全身を包み込んでいた。もはや身動きするだけでも、肛姦の快感が身体中で疼きを生んでしまう。突き抜ける衝動が頭の奥に染み広がり、思ってはいけない感情を抱かせてくる。その思いを追い払う

ように何度もオリアナは頭を振って、唇をキュウツと引き締めてこらえる。

「おおっ、おおっ！ この締めつけ……むははっ、どうやらイキおったぞ！」「マンコからもダラダラと涎を垂らして、間違ひありません」「やはり相当の好きモノだのお」

好き勝手に言つて神官たちが嘲笑するが、それを否定することなどできなかった。女性部分への愛撫も手伝つた先ほどとは違い、今度は真正正銘、お尻への刺激だけで達してしまつたのだ。そしてとうとう、頭の中に広がる想いが心にまで溢れ出てしまう。

(んくっ、くふううっ……ふあっ、ひっ……き、気持ち、いいっ……んっっ！)

ついに心の奥で本音をもらしてしまい、その屈辱に怒りさえ込み上げてくる。けれど這い上がる心地よさが粘液塗れの全身を撫で上げているような感覚に襲われ、オリアナは水浴びをした子犬のように全身を振って快感に悶えてしまう。否定できない快感を心が肯定してしまい、恥ずかしさで居たたまれなくなるが、その波は静まつてくれなかつた。

「はあっ、ひぐっ、ひうううんっ……んはっ、はあっ、はああ……」

絶頂の余韻に浸り、両腕も腰もヒクヒクと痙攣を繰り返す。頬を床につけるような格好で顔を伏せるも、緩んだ唇は床を舐めるように舌を垂らし、唾液の跡を残していた。

(き、禁忌を、犯す行為が……これほど、だなんて……)

ともすれば背徳者を擁護しているような感想を抱いてしまい、慌てて首を振つてそれを押し退ける。けれど傾きかけた心を折るチャンスだと感じ取られたのか、背後の中年男がすぐさま腰振りを再開させ、新たな若い神官までが正面から迫ってくる。



「むふふっ、イッたことでいい具合に緩くなりおったわい。そろそろこちらも、イカせてもらおうとしようかの……ふうっ、ぬうっ！」

「んひいっ……やっ、やめっ、て……くああんっつ！」

男の言葉通り、菊壺内は溶けてしまったように腸液で満たされて牡槍に絡みつくというのに、丸く開ききった肉皺は絶妙の力で締めつけ、それぞれの愛撫が男への最大の快感を送り込んでしまう。それを受けて肉棒が歓喜に震えると、振動は敏感になったオリアナの性感を直撃して狂おしいほどの肉悦をもたらし、四肢を熱く疼かせる。

「ひあっ、はああんっ……んっ、んぐううっつっ!!」

ヌルついた両手に肉棒が擦れ、悶えているその頭を引き寄せられた。髪を掴んで顔を上げさせた男が、力なく開いた唇に肉棒を捻じ込んでくる。

「聞きましたよ、この特赦の原因……かなり口で遊んでいたらしいじゃないですか」

（こ、こえ、はっ……あむうっ、くっ、ひゃっ……また、このようっ……）

髪の長い優男という風体の神官が、唇を歪めて腰を振り立ててくる。途端に鼻腔に突き抜ける牡臭と、口いっぱいに広がる熱気、そして蒸れた汗と恥垢の苦酸っぱい味わいで、あのとぎの感覚がフラッシュバックさせられる。

（うっ、しょお……こん、らっ……んぐっ、くひっ、ひあああっ！）

僅かな抵抗もできずに歯を開かされ、包皮に覆われた包茎ペニスを飲み込まされる。快感に潤んだ口内粘膜は牡槍の感触を受けてさらに蕩け、ゴリリッと肉を抉る音を響かせな

から内頬を突かれると、肉棒の抽挿を手助けするように自然と唾液を溢れさせた。

「んぐっ、くふううんっ、んぶっ……んじゆるるっ、じゅぶっ、じゅぽおお……」

乳房の先端を捏ねくり回され、濃厚な手つきで扱かれ、視界が眩むような快感に晒された記憶が甦る。ショーツ越しの淫唇を吸い立てられ、その奥の媚粘膜を舌で舐られた狂おしい肉悦が、口内で暴れ回る肉棒から伝わってくるようだった。

それと同時に、あのとときの口の動きまでが思いだされ、そうすればさらに気持ちよくなれると肉体が錯覚してしまっているのか、勝手に唇と舌が蠢いてしまう。舌をクネクネと躍らせ、頬を窄めて積極的に肉棒に粘膜を絡ませながら、唇を尖らせてジュポジュポと水音を奏で、はしたない口奉仕でしゃぶり立てるのが止められない。

(はみゅっ、んううっ……ろう、ひて……ころ、ようなあ……んぶっ、ぐぷううっ！)

「うっ、くっ……はははっ、本当に、すごっ……くっ、エロいシスターさんだ……」

かなりの早漏だったのか、男はすぐさま低く呻きながら腰を震わせる。そんな絶頂の気配を発して大きく膨らむ龟头を頬粘膜で擦ると、迸る快感に瞳が蕩け、溢れる唾液が口端から垂れこぼれていた。突きだした唇が男根に内から擦られる、その感触は菊壺を突き刺し抉るペニスからの快感とリンクし、ドロドロに混ざり合った濃厚な牝悦となって頭に染み込んでゆく。ビリビリと舌が痺れ、腸肉がヒクつき、敏感になったそれらの粘膜塊をさらに強く刺激され、涙がこぼれるほどの快楽にすり替わってしまう。

「じゅぶっ、んぐぶっ、くぷううっ……んじゆるるっ、じゅぽおお……」

(だ、めえ……です、わっ……んっ、み、見て、は……はあっ、あうううんっ！)

催情魔の瞳に猛烈な拒絶反応が込み上げるが、逸らすよりも早く少女の腰が小さく引かれる。刹那、絶頂の縁に立たされていた強靱な精神は、突き抜ける快感によって、甘い解放感とともに奈落へ叩き落とされてしまった。

「んぎゅっ、ひぐうううう……うんっ♥ んぶっ、んつくっ、んうううっ！」

頭の奥で弾ける火花が視界を明滅させ、全身を包む膨大な肉悦の波に、ビクビクッ、ビクウウンッ！ と壊れたカラクリ細工のように全身が痙攣する。自分でもわかるほどに膣肉が締まって肉棒を噛み締めてしまい、舌に舐められる口内粘膜が蕩け、心の奥から温かな痺れが染み広がってゆくのを感じさせられる。

(ふあっ、あっ、ううううっ……わ、私、またあ……んぐっ、イツ……イツては、だめっ、ですわあ、あっ……んあああっつっ！ だめええっ、イクッ、イクうううっつ！)

ついに牝恥をかかされた、しかも初めての性交で——忘れることなどけしてできない経験とともに恥辱を記憶の深い部分に刻み込まれ、女としての矜持に亀裂が走る。それで怒りを覚え、催情魔への抵抗が湧くのなら、許すとはいかないが我慢はできた。

それなのに、自分が感じているのはさらなる快感、そして相手を求める感情だった。

「んくっ、ふあっ……いひいっ、ひぐうううっ！ んはあああっつ！」

「あははっ、すっごい腰振ってる！ まだ誘惑してないのに、気持ちよくって仕方ないんだあ……ほら、ボクは止まってるんだよ？ いまニューポニューポってマンコから鳴ってる音

は、全部オリアナお姉ちゃんが自分で鳴らしてるんだよ？ 恥ずかしくないの？」

——グジュツ、グチュツジュプツ、ジュポオオオツ！ ジュブツ、チュブウツ！

「ひあああつっ！ ひがっ、あふっ、くはああんっ！ ひゃ、やつ……ひいっ！」

否定したい、抵抗したいと心でいくら願っても、絶頂を迎えて吹っ切れたかのように腰が跳ね、前後上下にガクガクと揺すられ、トロトロ粘液塗れの肉襷で男根を味わい、咀嚼し、牝穴で覚えてしまった初めての快楽を貪ってしまう。

（くあああつ、と……止まり、なさいなつ……んくっ、あつ、だ、だめええ……ひうううんっ！ んきつ……きも、ち……いひっ、いひっ……ふあつ、あんっ、んああつ♡）

迸る快感の嵐に瞳は大きく見開いてしまい、その中にチラチラと催情魔の瞳が映り込む。まるで模様を描くように赤い光が視界で揺れ、それを見ているだけで、さらに激しく腰が動いてゆく。お尻を浮かし、脚で抱き締める相手の腰を支えにして股間を押しつけ、肉棒に子宮口を突かせるように何度も何度も、淫部を相手に打ちつける。そのたびに赤らんだ頬が緩み、唇から舌を伸ばしただらしない顔で、甘えた喘ぎが解き放たれる。

「あひゅっ♡ あんっ、んあつ、はああんっ♡」

（とお、止ま、つれえ……んひっ、あつ……ふあつ、止ま、り、なひゃあ……）

朦朧としながらも胸の奥でささやき続けるが、意思から離れてしまったかのように肉体はオリアナの言うことなど聞かず、夢中になって腰を振り立てる。力強く腰を前後に揺すって子宮を叩かせ、けれど時折上下に角度をつけてゆっくりと動かし、初めての絶頂を迎

えた部分を刺激し続け、腫を細めながら快楽に耽る。隙間なく胎内を満たす淫魔のペニスは、少し動くだけで膣肉すべてを刺激して、充足感を心の奥に送り込んでくる。

「くひいいつ、あつ、はあつ、はあああ……あうううつ!? んくあつ、はああんつ！」

他に感じるポイントはないかと探すように、膣襞全体が肉傘で擦られ、そのたびに喉奥からはだらしなない喘ぎが逆る。腰の動きには緩急まで加わり、切ない疼きを送り込むゆつくりとした動きを見せながら、次の瞬間には強姦されるような激しい腰使いで快感を貪り、頭の奥まで真っ白にさせられながら、暴力的な官能の渦に囚われてしまう。

(くひあつ、ふあああつ! い、いけま、せんわああ……はふつ、んひつ、いひい……か、快楽、があ……あおおつ、んつ……な、馴染んで、しま、い……んくううつ♡)

それまでは恐怖さえ覚えていた強烈な快感に、少しずつ身体が順応してしまっているようだった。目の眩むほどの快感を受けるたびに引きつっていた顔は、敏感粘膜を擦られる直前になると、ぶら下げられた餌を喜ぶように唇が緩み、肉体は柔らかく震えて受け入れの準備をし、膨大な肉悦を押し込まれても歓喜の嬌声を響かせる。

快楽に慣れ、感じなくなったということではけしてない。むしろ肉体が従順になったせいで、その質は格段に増しており、どんどん膣肉が過敏になってゆくようだった。一擦りされるだけで背中が思いきり振り返って跳ね上がり、寝転ばされている椅子のような台の上でバタバタと悶え悦んでしまう。先ほどのような強烈な絶頂は懸命にこらえているが、細かい波なら幾度となく全身を揺らして頭に達し、そのたびに膣襞を蠢かして肉棒に吸い

ついているのが、自分でもはつきりと感じられていた。

「ひああああ——つつ♥ あうっ、ふああんっ、んはあああつつ！」

(どう、ひてえ……んぐっ、こ、こんな、感じ、てっ……んあああ……)

本当に彼女の言う通り、自分が骨の髄まで淫乱なせいなのだろうか。ティーナの影響か、芽生える弱気な感情をそれは違うと否定しても、これまでに自分が口や尻で快感を覚えさせられ、あまりにも背徳的な状況で牝恥を晒した、その記憶が拭えない。

(本当に……わた、くしはあ……っ、違い、ますわ……その、ような……くああっ！)

腰を引いた拍子に、亀頭の一番広い肉傘が膣口に引つかかかって止まる。柔軟にたわんで肉棒を受け入れる腔粘膜だが、これだけ大きく拡張されてしまうと、その圧迫感だけでとてつもない刺激が下腹部に広がり、ゾクッゾクッと背筋が震え上がらせられる。このまま引き抜かれるのか、それとも思いきり牝壺を刺し貫かれるのか、ゆっくりと肉襞を掻き撫でられるのか——妖しい期待は疼きになり、子宮付近の粘膜襞を痙攣させた。

けれど、その期待をすべて裏切るように、ティーナの腰の動きは完全に止まってしまい、戸惑った表情を浮かべた顔を、少女が真正面からジッと見つめてくる。

「ふふっ、ようやく入り込めたのかな……ねえ、お姉ちゃん？　こうして淫乱マンコ口を開かれてるだけでも、気持ちいいのかなあ？」

(んくっ……そ、そんなことっ……うふうっ、い、言う、わけが……ふあっ……)

ヌル、クチュウウ……と滑り気たっぷりの感触が腔肉に伝わり、粘膜伝いにお尻の奥に

まで甘い刺激が響き、尻穴が緩んで瞳が蕩けそうになる。けれど表情を引き締めつつ、なんとか相手の言葉を否定しようと口を開く。と——。

「んっ……き、きも……気持ち、いいですわあ……あうっ、はああんっ♥」

（え——な、なにを、言つて……んくっ、あうっ、ふああっ……）

思わぬ言葉を吐いた驚きに瞳を見開いていると、少女が笑いながら質問を続ける。

「あははっ、どうやら成功したみたいだ♪ じゃあさ、このまま思いつきり奥まで突いてもらうのと、チンポ抜かれちゃうのだったらどっちがいい？」

「い、あ……いやっ、ですわあ……突いてっ、くださいましっ……うううっ……」

（なっ——なぜですのっ、こんなっ……うくっ、う、動きなさいっ……っつ）

またしても同じ、頭に浮かべた言葉とは正反対の言葉を吐き、その口調は相手に媚びるように、甘えた調子に変わってしまった。しかも自分の意思で腰を動かそうとしても動かないのはもちろん、先ほどまでは意思に反して自然と動いていたはずなのに、それさえもなくなつて、腕と同じようにまるで動けなくなっている。

（だめ、ですわ……ど、どうして……いったいなにがっ……っつ!!）

そこでようやくオリアナが気づいたのと同時に、ティーナが真相を口にする。

「そういうこと、さつきから感じっぱなしになつてる間、ずっとボクの瞳を見続けてたからね……お姉ちゃんの心、一部だけ貸してもらっちゃった♪ 普通の会話は平気だけど、ボクの質問に嘘を吐けなくしておいたから……ふふっ、たっぷり本音で語つてね？」

無邪気に微笑んでそう告げる彼女の発言に、ゾクツと背中が恐怖で凍りつく。

「う、嘘ですわ、そのような……んっ、くうっ、ふああっ……どう、せ……私の本音を、逆転させた、とか、そういった……くああんっっ♡」

狼狽し、上擦った声で返そうとした瞬間、淫魔の指が膣口の上、肥大化した淫豆をクリクリと撫で擦り、またも軽い絶頂を迎えさせられてしまう。

「そんなつまらないことしても、意味ないでしょ？ お姉ちゃんを屈服させたことを証明するには、嘘じゃなくて本音が必要なんだから……あ、そうそう。ついでに言っておくと、動けなくしたのもボクだよ。もしお姉ちゃんが『なにか』したくなったら、ボクにお願いするしかないからね。嘘を吐けなくなった口で、可愛くおねだりするんだよ♪」

「うふううっ……ふ、ふざけた、ことっ……どこまで、私をコケにっ……」

ニヤニヤと笑みを浮かべるその態度に、それまでの恥辱や悲痛を上回る、久しぶりの純粹な怒りが込み上げる。けれど口から吐きこぼれるのは、その感情を包み込めるほどに大きな本能の叫び——牝としての肉体が訴える、抗えない願望だった。

「ほらほら、まずはなにをして欲しい？」

「はや、く……私の身をつ、じ……ゆ、んっ……ふあっ、お……犯してえっ！ 大きな、チ……チンポでえ……は、激しくうっ、奥……までっ、ジュポジュポしてえっっ！」

（ひっ……い、あっ……いやああああ——っっっ！）

自らの口が紡ぎだす卑猥な願いを聞かされ、それがはつきりと肉体の本音だと突きつけ

られ、羞恥の炎に身を焦がされる。けれど吐きだした言葉は戻らず、その叫びを聞いた周囲からは突き刺すような好色の視線が集まり、同時にティーナに対しての、尊敬と畏怖の眼差しが集まってくる。

「へえ、犯して欲しいの？　じゃあ動けるようにしてあげよつか？　そうしたら自分で感じられるし、それで十分じゃない？」

「それは、む……無理ですわあ、はあつ、あんつ……だ、だつてえ……私い……」

（やつ、いやつ……言わないでつ、言つてはいけませんの……んつ、くああんつ……）

いくら否定をしても、自分の肉体のことなのだ。心の奥底に眠る本能がなにを求めているのか、その自覚が羞恥心を刺激し、熱くなっていた顔がさらに赤く、耳先まで燃えたように染まってゆく。けれど、催情魔の瞳によつて心を奪われ、嘘も拒絶も許されない唇が勝手に動き、切なく呻きながら返してしまう。

「や、やり方が、わかりませんからあ……んあつ、あつ……あな……た、にい……」

喉奥に飲み込もうとするも、言葉が抑えを振り切つて吐きだされてゆく。

「気持ちいいところ、貴女に犯されたいのですわあつ！　はうつ、んあああつつ♥」

——ジュルルウウツ、グプツ、グポオオオツ……チュブンツツ！

叫んだ瞬間、膣口を大きく開かされてヒクヒクと震え、淫涎を垂れ流しにしていた膣道が一気に擦り貫かれた。突き抜ける衝撃に瞳は裏返り、歓喜に笑んだ唇から舌先がダラリと垂れ下がる。淫唇の内側ばかりを責め立てられ、焦らされたその僅かな時間が、長大な

肉棒の味を何倍にも濃厚に、美味にして子宮の奥を震えさせる。けれど同時に、僅かな物足りなさが下腹部をムズムズと疼かせ、その感覚が羞恥を芽生えさせてもいた。

「んくっ、ふぁあっ……あうっ、はうらんっ……んはぁっ♥」

「ぷっ……くっ、くくっ、あはははっ！ いい声で啼いてくれるね、お姉ちゃん！ そんなトトロの顔しちゃって……ボクのチンポ、そんなに好きなの？」

根元が埋まるほど深く、オリアナの牝肉を蹂躪して舌舐めずりしながら、耳元に唇を寄せた少女がささやいてくる。その声音はパトリツイオのものとは違うのに、あのととき以上の感情が心を鷲掴みにしたように衝撃を訴え、ジンと頭の奥が熱く痺れてゆく。

（はうっ、い、やぁぁ……これ以上、なにも聞かないで……く、だ……んんっ……）

催情魔の瞳、その威力は淫魔のものとはまるで違っていた。ただ淫欲を煽るだけではなく、人格ごとその人間を惑わし、支配しようとする意思を感じる。自分の意思があるのに、本能だけは相手の言葉に従ってしまう——心を奪われるという初めての経験に、オリアナの神聖騎士としての精神が、少しずつ萎えさせられているようだった。

「はぁっ、ふうっ、んふううう……す、好きい、です、わっ……あきゅうらんっ♥ んはっ、あっ……チ、チンポ、好きいっ！ 逞しくて、気持ちいいですのおっ♥」

「ん〜、偉い偉い♪ よく言えたねえ……ほら、ボクの目を見てもっと言ってよ。思ってること全部口にして、も〜っと支配を強くしちやおうねえ？」

明らかに年下と思える外見の少女が、自分より年下の子供にそうするように頭を撫で、

腰を抱き寄せられる。真正面から赤い瞳に睨みつけられ、騎士としての誇りが——神子や、ソルトリアへの信仰心がその視線から目を逸らそうとするが、すでに身体と心の大半を奪われてしまった銀の修道女には、どうすることもできなかつた。

「う、うう、いやああ……私の、心に入り、込まないでえ……んつく、くあつ、ふあううんつく……あくつ、あつ、ああんつく♥　そ、そこですわあつ……そこ、ち……チンポの、先っぽでグリグリッてえ……んううつく♥　あいつ、ひいひいんつくっ！」

子宮口を押し込まれ、腰が跳ね上がった瞬間に少女の腰が幾度も挿挿を繰り返し、ジュブツ、ジュポオオツ！　と肉と粘膜が擦れて粘っこい水を吐きこぼす、耳障りなほどいやらしい音が響き渡る。淫魔に侵されている影響なのか、感覚の鋭くなった肌には周囲の視線が痛いくらいに突き刺さり、湧き上がる羞恥で背筋が痺れさせられる。それなのに、その恥辱に震える心でさえも性欲に変換されてしまうのか、性本能に対してあまりにも貪欲な肉体は、歓喜に跳ね震えながらもさらに言葉を募らせてゆく。

「はぐつ、んはあああんつく！　もつと、もつと腰動いてえつ……は、激しく突いてくださいましつく！　ふううんつく、んはつ、あつ、あーつく♥　そこつ、そこですわあつ！　いっぱい動いて、全部擦って欲しいんですのつ……んつく、お、お尻もお……もつとお……」

先ほど感じた感覚が、口を衝いて飛びだす。けれど心底から覚える羞恥がそうさせるのか小声になり、喘ぎに混じって周囲には聞こえないようだった。けれどか細い声まではっきりと聞き取った淫魔少女がニヤリと唇を歪め、声を大にして問いかけてくる。

「えっ、最後はなんて言ったの？ 聞こえなかったなあ……はい、もう一回大声で♪」

(~~~~~つつつ、な、なん、と……いう、こと……あ、ああ……主よ……)

御許しくださいと、全身全霊で願いを心に浮かべるも、もはや身体がその願いをかなえる必要などどこにもない。理性の鎖を引き千切った欲求が、淫魔に新しく着けられたリードに引かれ、躊躇うことなく大声を上げてしまう。

「お、お尻っ、お尻ですわああっつ！ お尻の穴、穴あ……んんううっつ！ アナルですわっ、お……犯してっ、お願いですのおっ！ もっと気持ちよくしてっ、アナルの奥までズボズボしてくださいませええっつ！」

(うああああっつつ!! いっ、いやっ、もう……こんな、いやああ……)

両手を動かして顔を覆いたくなるほどの羞恥、けれど頭の後ろで動かなかった手は逆に催情魔の背中に回ってギユウツとしがみつぎ、両足と腕でガツチリとロックしてしまう。それもすべて、お前自身の欲望の声だ——そう断言されたような状態になり、恥ずかしさと自己嫌悪で消え入りたくなるほどだった。

「ええ〜？ お姉ちゃん、シスターさんなのにアナルセックスしたいのお？ 昨日されたので、クセになっちゃったのかなあ……まあ、どうしても言うなら自分で弄つてもいいよ？ だけどさあ、こんな神様のお家でそういうことするの、悪いと思わない？」

わざと子供ぶつた口調で、聖堂内に響き渡るほど大きな笑い声でティーナが問うが、それに怒りを覚えてもオリアナの答えは変わらない。先ほどのオリアナの大声でのおねだり

を聞いてニヤニヤと笑う観衆たちの前で、神聖騎士は屈辱的な告白を叫び続ける。

「あうっ、んはああっつ！ しゅ、主よお、御許しをつ……で、ですがっ、ああんっ、はっ……チンポで、オ……オマンコ、擦られると、我慢できませんのおっ！ あうっ、あつ、やあ……ふあああんっ♥ はあ、お尻、ズボズボするのお……たまりません、わあ……んっく、はあ、あああ……も、もう、ずつとそうなのですわあっ！」

幼い催情魔に、見た目からは信じられない力で抱き上げられたオリアナは、彼女に両脚と片腕で抱きつき、空いた片手でグリグリと菊穴を穿りだしてしまふ。膣肉を犯され抜いて、緩みきつた括約筋によって尻穴は容易く指を飲み込み、愛液に劣らぬ勢いで流れる腸液を絡めて、ニユプニユプと不浄の穴から淫音を奏で始める。

「んくうううっ！ ふやつ、あつ、はやあああんっつ♥ あつ、もつ、もおつ……んくつ、ま、またあ、イクうううっ♥ んっ、んっ、んん——っつ♥」

自らの指で腸粘膜をとこ構わず穿り返し、引っ掻き回すたびに、強烈な快感がドクドクと脊髄を駆け上がり、脳天を揺らして視界を眩ませる。アナルが蕩け落ちそうな甘い刺激に加え、膣肉を犯す暴力的な蹂躪が重なり、激しい絶頂の波が全身に押し寄せてくる。キュウウツと彼女の身に縋りついて背中を丸め、尻肉がタプタプと揺れるほどの痙攣を終えたオリアナが顔を上げる。その表情は歓喜に瞳を細め、溢れた唾液で唇の周りをベトベトに汚した、とても修道女とは思えない淫らかなものだった。

「んっ、はっ、あああ……も、もう、廊下で……い、いえ、違いますわあ……清掃、中に



い……アナルを舐めていた、ときから……んくうつ、ふいつ、ひはああ……わ、
わら、くひい……お尻の、快感につ……んつ、み、魅入られていましたのおっ♥」

(ふぁ、ああ……も、もう、おやめなさい、そのようなぁ……うつ、うううつ……)

自らの深層心理で感じていた快感を思いだし、羞恥で死んでしまいたいそうだった。真つ赤
になつてそんな告白をするオリアナの姿を見て、淫魔少女が囁きたてる。

「えー？ あぁ、そういえばきつたない中年に、ケツ穴しやぶられてたよね……ふふ、
呆れちゃうなあ。あんなオヤジ……それも神官相手にケツ穴しやぶらせて、アナルアクメ
するくらい感じてたんだ。ふうん……そんなに感じちゃうんじゃ、さぁ——」

「んんうつ!! ふぁつ、あつ、はぁあん……♥」

お尻を支えていた催情魔の手が、豊富な尻房を形が変わるくらいの力で揉みしだき、そ
の感触に背中が痺れる。そうされただけで、もつと奥を、内側を弄つて欲しいという最低
の欲求が心に満ち溢れ、犬のように垂らした舌からダラダラと唾液が滴り落ちる。

「——指なんかじゃ足りないよね？」

「あ……あつ、そ……それ、は……んつ、ふううつ……くうつ、ううんつ……」

尻肉を揉む手の指先が谷間に食い込み、大きく開いた菊皺の縁へ、爪の先端で擦るよう
に刺激を与えてくる。ブルルツと身震いし、その感触がたまらないというように瞳を細め
て相好を崩したオリアナは、甘えるような媚びた口調で答えていた。

「はふつ、は、はぁ……いい……んつ、た、足りません、わぁ……」

ニヤリと笑ったティーナの手が太ももを抱えて背中を支え、腰を突き上げて肉棒を支点にし、オリアナの身体を持ち上げる。子宮口を亀頭に押し開かれる衝撃に目を見開き、プシユウツ……とおもらしのように淫液を噴きこぼしながら、潤んだ瞳で振り向いた修道女は、自身の手で尻肉を掻き分けて菊皺を曝けだし、裏返った声で告げた。

「んおっ、おくううっ……ん、ど、どなたでも、かまいません、わっ……ど、どうぞ、私の……オ、オリアナのお尻……アナルにつ、んううっっ♥ ケ、ケツっ……ドスケベケツ穴にいいいっっ！ チンポツ、チンポ突っ込んでくださいませえっっ！」

動きにくい状態ながら、フリッフリッと腰を振って尻を突きだすと、牝臭と混じり合った濃厚な体臭がオリアナの下腹部全体に立ち上り、周囲に広がってゆく。それを聖堂内に充満させようとするのか、ティーナはオリアナに恥ずかしい格好をさせたままで、淫魔や神官たちの間を練り歩き、懇願を続けさせてくる。

「あ、ああ……んくっ、はふううう……んはっ、チン、ポがあ……おうっ、んふううんっ！ あっ、くるっ、オマンコ、ゴリゴリ削られてっ、しまいますわあっ♥ あうっ、んんううっ！ もっと、欲しいのですわ……ケツ穴あ、ズボズボしてくださいなあ……」

数人のペニスを受け入れて、膣口よりも格段に柔軟になった菊穴を指先でグイッと開き、性交に耽る何人もの人々に、腸内を覗かせる。その好色な視線が、淫猥な嘲笑が心の奥に刺さり、腸肉を犯し、たまらない羞恥と快感に満たされてしまう。

（んぐっ、ふぐうううっ……わ、わらひ、の、身体はあ……あうっ、も……）

この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行

株式会社キルタイムコミュニケーション

〒104-0041 東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル

TEL03-3555-3431 (販売) / FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

©KILL TIME COMMUNICATION Printed in Japan

<http://ktcom.jp/>

キルタイムコミュニケーション小説シリーズ あなたはどのタイプ?



ドキドキラブな
ハーレム系ライトノベル!

二次元
ドリーム文庫

サイズ:文庫

戦うヒロインが屈服されちゃう!
かなり過激なライトノベル!

二次元
ドリームノベルズ

サイズ:新書

※「二次元ドリームノベルズ」は18歳未満の方は購入できません

日常に密着したエロス、リアルな
舞台設定で送る官能小説レーベル!

リアルドリーム文庫

サイズ:文庫

フリーダム度120%!?
ジャンルにとらわれないドキドキ★ラノベ!

あとみっく文庫

サイズ:文庫

詳しくはKTCの公式サイトにて! キルタイム

電子書籍版も各ダウンロードサイトにて続々配信中!!



あなたのキモチイをお手伝い!

キルタイムのアダルトコミック誌!

業界唯一! エロラノベ&エロコミック満載!!

11年目も激しさそのまま、お楽しみもそのまま!

EDDREAMIMM

さらさら
おもしろ
おもしろ
おもしろ

偶数月
17日発売

Vol.61
2011年12月

ニ次元ドリームマガジン

魔法、催眠、性転換...不思議Hコミック誌!

大興奮! 魔法少女14人の大冒険!

魔法少女
Hisasi

奇数月
12日発売

コミックファンリアル

フェチをテーマにツキ抜ける作品群!!

Prism
コミックプリズム

18歳以上
420円

あつぱらどキ
いはい聞かせて

2・6・10月
下旬発売

コミックプリズム

KTCといえば闘うヒロインアンソロ!

メガミクライシス

雷のライ
対魔ガ
フルブルギスの
チャオ

奇数月
中旬発売

淫らに墮ちまくる
アンゴジー!

メガミクライシス

詳しくはKTCの公式サイトにて!

キルタイム

検索



電子書籍版も各ダウンロードサイトにて続々配信中!!

※いずれも18歳未満の方は購入できません。



キルタイムコミュニケーション オフィシャルサイト

<http://ktcom.jp/>

- ◎雑誌、コミック、小説の通信販売もやってるよ!
- ◎二次元ドリームマガジン・コミックアンリアルのパックナンバーも買えるよ!
- ◎ジャンル別で作品も選べて超便利!
- ◎二次元編集部のおいしいBlogも更新中!



<http://www.comic- Valkyrie.com/>



<http://www.cran-berry.com/>



<http://www.mille-feuille.jp/>



<http://www.2d-dream.jp/>

KTCの戦うヒロインオンリー漫画雑誌! 18禁ではないからこそ表現できるドキドキがある!!

二次元ドリームノベルズがアニメにも進出! 新生ブランド・cranberryをよろしく!!

二次元ドリームノベルズから生まれた美少女ゲーム! 「ミルフィーユ」ブランドにて続々登場!

二次元ドリームノベルズが携帯電話で読める! 携帯サイト限定の書き下ろし小説もあるよ!